

【原 著】

## 育児をする母親のソーシャル・サポート・ネットワークの実態

野 口 眞 弓\*1, 新 川 治 子\*2, 多賀谷 昭\*3

## 【要 旨】

ソーシャル・サポートの存在が、母親の育児不安を軽減させることは既に知られているが、実際のネットワークの状況は明らかにされていない。そこで、育児をする母親がどのようなソーシャル・サポート・ネットワークを持ち、そのネットワークについてどのように考えているかを明らかにすることを本研究の目的とした。広島市近郊のA市が開催する育児相談に参加する母親35名にインタビューを実施し、それらの記述を文脈単位で264、サンプリング単位で35に区分して内容分析を行った。その結果、育児に関する文脈単位の分析では、「育児相談への参加理由」、「育児状況の評価」、「夫の育児協力」、「夫以外の育児の相談相手」、「夫以外の育児の実地的な手助け」、「近隣の状況」、「母親同士の交流」、「母親の外出」、「子どもの友だち」、「母親の就業」という10のカテゴリーが得られた。サンプリング単位の分析では、43%の母親が現状のネットワークに満足し、51%の母親がネットワークを拡大したいと考えていることが明らかとなった。

【キーワード】 育児, 母親, ソーシャル・サポート・ネットワーク

## は じ め に

1980年代以降、育児不安という現象に社会的な関心がもたれ、数多くの研究が行われてきた。育児不安は、育児を通して感じる具体的な心配事として捉えられる場合と育児に関して感じる疲労感、意欲の低下、育児困難感、不安、心配などのストレスとして捉える場合とがあり、概念が曖昧であるとの指摘がある(吉田他, 1999; 坂間, 山崎, 川田, 1999)。牧野(1982)は、育児不安を育児に関する育児困難感などのストレスという視点から捉え、それが「一般的疲労感」、「一般的気力の低下」、「イライラの状態」、「育児不安徴候」、「育児意欲の低下」という5つの特性を持つと考えた。その後、育児不安の測定を目指して因子分析を用いた研究が行われ、川井ら(1994)は、牧野(1982)が想定した「イライラの状態」、「育児不安徴候」、「育児意欲の低下」に類似した「育児困難感」と牧野(1982)が想定した「一般的疲労感」、「一般的気力の低下」とは異なる「不安・抑うつ」という2因子を抽出した。また、榊本ら(1999)は、川井ら(1994)の「育児困難感」に

抑うつの項目を加えた「育児困難感」、牧野(1982)の「育児意欲の低下」の反対の内容を意味する「楽しい・満足感」、牧野(1982)の「育児不安徴候」と類似した「拘束感」という3因子を抽出した。さらに、育児不安スクリーニング尺度の開発を目指す吉田ら(1999)は、「夫のサポート」、「相談相手の有無」などを含む6因子を抽出している。これらの結果は、育児に関するストレスという視点に限っても、育児不安の構成概念は未だ明確でないことを示している。

以上のように、測定される内容は尺度によって多少異なるが、何れの尺度を用いた場合も、育児不安は夫の育児協力およびソーシャル・サポートを得ることで軽減するという同一の結果が得られている(牧野, 1982; 川井他, 1994; 坂間他, 1999)。そこで、育児不安を軽減すべく、行政などでは育児相談、乳幼児クラスの開催、母親たちがかわりをもつためのサポート・グループの育成などが行われている。核家族化、少子化、近所づきあいの稀薄化と、現代日本人の生活環境は戦後大きく変化しており、それらの変化は、育児をする母親のソーシャル・サポー

\*1 日本赤十字広島看護大学 noguchi@jrchn.ac.jp

\*2 日本赤十字広島看護大学 shinkawa@jrchn.ac.jp

\*3 長野県立看護大学 tagaya@nagano-nurs.ac.jp

ト・ネットワークの存在様式とそれに対する母親の認識に大きな影響を及ぼしていると考えられるが、その詳細を明らかにした研究はこれまで行われていない。そこで、ソーシャル・サポート・ネットワークをさまざまな形の援助を提供しあう重要他者とのつながりと捉え、本研究の目的を、育児をする母親のソーシャル・サポート・ネットワークの範囲および母親のネットワーク拡大の意図の有無を明らかにすることとした。

## 方 法

### 1. 研究対象とデータ収集期間

2000年6月から7月まで、広島市近郊のA市が開催する育児相談に参加した母親35名を対象にインタビュー調査を行った。対象の平均年齢は29.9歳、80%が初産婦であり、子どもの平均月齢は9.1か月で家族形態は大部分が核家族であった（表1）。

表1 対象の特徴

対象35名の特徴		
母親の年齢	Mean ± SD Range	29.9±3.9歳 24-40歳
子どもの数	1人 2人 3人	27人 7人 1人
子どもの月齢	Mean ± SD Range	9.1±5.0か月 2-24か月
子どもの性別	男 女	23人 13人
家族構成	核家族 複合家族 不明	31人 2人 2人
※双胎を含む		

### 2. 研究の場の特徴

A市は、広島市のベッドタウンとして大規模な住宅団地の開発が行われ、平成6年には人口が7万人を越え、平成7年の出生率が10.6%、0歳～14歳までの年少人口が22.2%、65歳以上の老年人口が12.2%と全国平均と比較して年少者が多く、老年者が少ない地域である。この市には11の公民館があり、そこでは公民館の主催や自主活動による幼児教室や、市の事業としての育児相談、4か月児などの健康診査、パパママスクールなどが開催されている。育児相談は、体重お

よび身長測定、保健婦あるいは栄養士との個別相談をするもので、毎月3回いずれかの公民館あるいは市役所で開催されている。平成7年度の育児相談の年間相談者数は956名で、1回の育児相談に平均26.6名が訪れていることになる。

### 3. データ収集の手順

育児相談を主催するA市には、事前に研究の趣旨を説明し、研究参加の同意を得た。育児相談に訪れた母親には、相談までの待ち時間あるいは相談終了後に研究の趣旨を説明し、研究参加の同意を得た後に15分から40分程度の準構成的なインタビューを調査者2名で行った。インタビューでは、「育児相談には初めていらっしゃいましたか?」、「育児を始めてからあなたの生活はどのように変わりましたか?」、「育児をしていて、誰かと話しがしたいとか、誰かにそばにいて欲しいと思うことがありますか?それはどのような時ですか?」と質問をし、あとは母親が自由に話せるように相槌をうち、母親の話に関連した質問を行った。インタビュー終了後に逐語録を作成した。

### 4. データ分析

母親のインタビューの記述を文脈単位およびサンプリング単位で内容分析をした。文脈単位での分析では、35名のデータ全てを育児に関する文脈に区切り、カテゴリーに分類した。また、サンプリング単位の分析では、対象者毎に妊娠、出産にともなうソーシャル・サポート・ネットワーク拡大の意図の有無を分析した。

## 結 果

### 1. 母親が話した育児のカテゴリー（表2）

文脈単位の分析では、育児に関する文脈264単位を

表2 分析単位とカテゴリー

分析単位	カテゴリー	該当者	データ数
文脈単位	育児相談への参加理由	35 (100%)	35
	育児状況の評価	24 (69%)	29
	夫の育児協力	24 (69%)	24
	夫以外の育児の相談相手	14 (40%)	22
	夫以外の育児の実際的な手助け	19 (54%)	36
	近隣の状況	15 (43%)	18
	母親同士の交流	18 (51%)	35
	母親の外出	25 (71%)	38
	子どもの友だち	15 (43%)	17
	母親の就業	9 (26%)	10
	合 計	198	264
サンプリング単位	育児をする母親のネットワーク	35 (100%)	35

表2に示した10のカテゴリーに分類した。サンプリング単位の分析では、育児をする母親のネットワーク拡大の意図を「現在あるネットワークに満足している」、「ネットワークを拡大したい」、「ネットワークを拡大したくない」、「近所でのネットワークはない」の4つに分類した。

## 2. 育児相談への参加理由 (表3)

参加理由は、子どもの成長の確認、育児に関する情報の獲得、話し相手を求めてであった。母親の育児相談への参加回数は、初回が16名、複数回が19名であり、複数回参加者は話し相手を求めて参加することが多かった。以下では、それぞれの分類の定義とその例を示す。

### 1) 子どもの正常な成長の確認

母親は子どもの成長には異常があるとは思っていないが、子どもの正常な成長を確認するために育児相談に参加していた。

2か月の子どもを持つ26歳の母親は、「母乳で育てており、たぶん問題はないと思ったが、子どもの身長と体重が知りたかったので、育児相談に初めてきた。」と話した。

### 2) 正常範囲から逸脱しそうな子どもの成長、発達の確認

母親は子どもの成長、発達が正常範囲からはずれかけていることを認識しており、子どもの成長、発達を確認するために育児相談に参加していた。

3歳と2か月の子どもを持つ32歳の母親は、「下の子は母乳でやっているし、1か月健診の時に体重の増えが良くなかったので心配で育児相談にきた。」と、また、1歳3か月の子どもを持つ35歳の母親は、「子どもの発育が遅いのが心配で、育児相談に何度も来ている。」と話した。

### 3) 育児に関する情報収集と判断の保証

母親は保健婦および栄養士から育児に関するより詳しい情報を得、また、専門家に自らが判断したことを大丈夫だと認められたいために育児相談に参加していた。

11か月の子どもを持つ26歳の母親は、「予防接種後のカサブタが心配で育児相談にきた。育児中の友人に相談し、友人は大丈夫と言ったが、このまま様子をみて良いのか心配になり相談にきた。」と話した。

表3 育児相談への参加理由

参 加 理 由	人 数		
	計 (%)	初回	複数回
子どもの正常な成長の確認	6 ( 17%)	5	1
正常範囲から逸脱しそうな子どもの成長・発達の確認	6 ( 17%)	3	3
育児に関する情報収集と判断の保証	6 ( 17%)	3	3
育児に関する情報収集と話し相手を求めて	4 ( 11%)	0	4
おもに話し相手を求めて	8 ( 23%)	1	7
不明	5 ( 14%)	4	1
合 計	35(100%)	16	19

### 4) 育児に関する情報収集と話し相手を求めて

母親は保健婦および栄養士から育児に関する情報を得るとともに、育児中の母親と気軽に話をしたいために育児相談に参加していた。

1歳3か月の子どもを持つ27歳の母親は、「今日はトイレット・トレーニングの話を聞くために育児相談に参加したけど、こういうところに来ると誰かが話しかけてくれるので、育児相談には来るようにしている。」と話した。

### 5) おもに話し相手を求めて

母親は育児に関する情報を得ることよりも、育児中の母親と気楽に話しができるという理由から育児相談に参加していた。

7か月の子どもを持つ27歳の母親は、「育児相談に来るのは友だちを作りたいから。」と、また、10か月の子どもを持つ37歳の母親は、「育児相談があれば、重大な相談がなくても来るようにしている。」と話した。

## 3. 育児状況の評価 (表4)

24名の母親が育児の状況の評価した。育児に関する気がかりである「心配事」、育児による心身の疲労を表す「気持ちも体もつらい」、育児による身体疲労を表す「体がつらい」、子どもとの生活の調整

表4 育児状況の評価

育 児 状 況 の 評 価		人数
心配事	心配なことがない	4
	たいしたことはないが気になることがある	3
	心配なことがある	3
	こだわることをやめた	2
気持ちも体もつらい		7
体がつらい		2
生活の変化	子ども中心の生活	6
	育児と仕事の両立	1
	生活に変化がない	1
合 計 (24名の重複回答)		29

をする「生活の変化」がある。

6か月の子どもを持つ24歳の母親は、「生まれてから2か月まで陥没乳頭で子どもが全く母乳を飲むことができず、乳房が張ってつらく、自分自身が消耗した。薬を使って母乳を止めてからは、楽になった。ミルクを飲ませていますとけろっと言えるようになってからは楽になった。それからは楽しいことばかり。」と母乳にこだわることをやめ、心配事がなくなったと話した。

#### 4. 夫の育児協力

母親のほとんどが核家族の中で育児をしていることから、育児に対する夫の協力が求められる。24名(68.6%)の母親が、夫の育児協力を言及し、夫を協力的と評価した母親はそのうち15名、非協力的と評価した母親は9名であった。夫の育児協力には、子どもの入浴、おむつ交換、外出または散歩、離乳食を食べさせる、子どもと遊ぶなどがあった。

1歳3か月の子どもを持つ27歳の母親は、「子ども中心の生活になったことで、一番の被害者は夫だと思う。夫は、妊娠中から子どもが生まれることを待ち望んでいたもので、よく育児に参加する。

夫は、土曜日、日曜日と仕事に行くが、平日に一日休めるので、その時はもう子どもとぴったりと一緒にいる。」と夫の育児協力について話した。また、2歳4か月と8か月の子どもを持つ28歳の母親は、「夫は夜遅く仕事からもどることが多く、自宅にいる場合は、私が食事の支度などで手が離せない時に子どもが泣いても横になってテレビを見ており、子どもをあやさないなど、育児に非協力的である。『誰の子よ』と言えば喧嘩になるので、もう1人子どもがいると自分に言い聞かせて、『うるさくて、ごめんね』と言って、子どもが泣いてもそのままにしておく。」と夫の協力のなさについて話した。

#### 5. 夫以外の育児協力(表5)

夫以外の人からの育児協力には、育児の相談相手になることと実際的な手助けとがある。育児の相談相手は、子どものいる友だちである場合が多く、なかでも、妊娠、出産後にできた友だちに相談することが多かった。

6か月の子どもを持つ28歳の母親は、「育児をしている時のいろいろな心配事は、乳児サークルに

表5 夫以外の育児協力

夫 以 外 の 育 児 協 力					人数
育児の相談相手	身内		実 母	1	3
			義 母	1	
			姉	1	
	妊娠前からの友だち		子どものいる友だち		4
	妊娠・出産後にできた友だち (自分の子どもと同じぐらいの子どもがいる)		出産した病院での友だち	4	5
			市が開催したマタニティー・スクールでの友だち	1	
	妊娠・出産後にできた友だち (自分の子どもより大きな子どもがいる)		育児相談にきた母親	2	5
			育児サークルのメンバー	1	
			近所の育児経験者	2	
	専門家		医師	1	5
			保健婦・栄養士	4	
合 計 (※14名の重複回答)				22	
実際のな手助け	同居親族		義 母	1	
			上 の 子	1	
	別居親族 (自宅にきてくれる)		実 母	3	
			実 姉	1	
	同居親族 (子どもをつれていく)	夫の実家	5	義 父	5
			5	義 母	5
		自分の実家	9	実 父	9
			9	実 母	8
			9	実 兄	1
	その他 子どもの保育園入園				2
合 計 (※19名の重複回答)				36	

生後2か月半で規程より早めに入れてもらったので、そこで相談するようにしている。自分の子どもがサークルの中では一番小さいので、今後起こることをいろいろと聞くことができ、とても助かっている。」と出産後にできた友人たちについて話した。

実際の手助けは、実母、実父、義母、義父から受けることが多く、それは父母の家に子どもを連れて行くことで得られることが多かった。

10か月の子どもを持つ37歳の母親は、夫の仕事が忙しく夫からの育児協力が期待できない。「〇〇に自分の実家がある。父母は子どもが来るととても喜ぶが、70歳なので子どもが帰った後にとても疲れるようだ。私も子どもとずっと一緒だと疲れるので、土、日曜日にはJRに乗って自分の実家に行くことも多い。」と実家での育児協力について話した。

## 6. 育児の人的環境 (表6)

育児の人的環境としては、近隣の状況および母親同士の交流がある。近隣の状況では近所づきあいがなく、子どもがいないとするものが多く、また、母親同士の交流では、育児の相談相手の場合と同様に、妊娠、出産後にできた友だちが多かった。

表6 育児の人的環境

育 児 の 人 的 環 境			人数
近隣の状況	近所づきあい	転居して間もない	4
		近所づきあいがいない	5
		町内会活動に参加しない	1
	近所の子ども	子どもがいない／少ない	7
		子どもが比較的いる	1
	合 計（※15名の重複回答）		18
母親同士の交流	交流相手	妊娠・出産前からの友だち	9
		妊娠・出産後にできた友だち	14
		近所の人	2
	交流の質と量	人との交流は増えていない	3
		人との交流を深めたくない	1
	交流の時期	育児に慣れた頃	3
		夫の不在	1
交流の重要性			2
	合 計（※19名の重複回答）		35

## 7. 母親と子どもの友だち作り

表7に母親の外出と子どもの友だちについて示した。ここで話された母親の外出の大部分は、子どもを持つ母親との交流を求めているものであり、その場所は、育児相談、乳幼児クラス、スイミング・スクール、公園、公民館であった。

2歳4か月と8か月の子どもを持つ28歳の母親

は、上の子どもが乳児の頃を思い出し、「最初の子どもの時には、不安で孤独だった。生後7か月ぐらいの時には、誰かとかかわりが持ちたくて、ベビーカーに子どもを乗せて出かけたこともある。子ども同士がかかわりを持たないと、母親同士は話すきっかけがないので、子ども連れの母親が公園にいても、互いにかかわりをもてないこともあった。」と公園での思い出を話した。

また、子どもの友だちに関しては、半数程度の母親が、子どもに友だちを作ってやりたいと思っているが、実際にはできないのである。

6か月の子どもを持つ36歳の母親は、「子どもの友だち作りは考えているが、うまく行かない。マンションに住んでおり、隣に1歳ぐらいの子どもがいることは声がするのでわかるが、顔をみたことがない。幼稚園にあがるまでは、どのように友だちを作ったらよいのか、周囲の人がどのようにしているのかわからない。」と子どもの友だちの作り方がわからないと話した。

さらに、子どもの友だち作りには別の障害がある。

4歳と5か月の子どもを持つ32歳の母親は、「母親同士の年齢があまり違うと話が合わないので、同年代の母親で、できれば子どもの性別が同じで、母親のしつけの方針が同じことが、母親や子どもとつきあう条件となる。」と母親同士が友だちになる条件を話した。

表7 母親の外出と子どもの友だち

母親の外出と子どもの友だち				人数
母親の外出	子どもを持つ母親との交流を求めて	育児相談	13	33
		乳幼児クラス	9	
		スイミング・スクール	2	
		公園	7	
		公民館	2	
	子どもとの気分転換	散歩	3	
	日常生活に必要	買い物	2	
	外出できない		1	
	合 計（※25名の母親の重複回答）		39	
子どもの友だち	子どもに友だちがいる		5	
	子どもに友だちがいない	友だちの作り方がわからない	1	7
		友だちを作ってやりたい	3	
		友だち作りを焦るのはやめた	2	
		友だちは自然にできるだろう	1	
	子どもに友だちはいらない		1	
	友だち作りの障害	母親との相性	2	4
		母親に話しかけられない	2	
合 計		17		

## 8. 母親の就業

9名の母親が就業について話した。このうち2名は現在も就業中で、3名が育児休暇中、1名が復職を考慮中であったが、3名が今回の妊娠、出産を機に退職していた。

現在育児休暇中の保育士である母親は、「以前小さい子どもを持つ母親が働くのは、経済的に苦しいから働かざるを得ないからだったが、最近は、経済的には問題がなくても、0歳から子どもを預けて働く母親が増えてきた。それが、たとえ3時間のパートタイムでも子どもを預ける。パートの前で家を片づけ、食事の支度をしてから迎えに来る。子どもが母親を待って保育園で荒れるような場合は、母親にもっと早く迎えに来るように言うこともあるが、子どもを預けて働いている母親の方が、生き生きとしていることが多い。」と母親の就業について話した。

## 9. 育児をする母親のネットワーク

サンプリング単位、すなわち対象者毎に妊娠、出産にともなうソーシャル・サポート・ネットワーク拡大の意図の有無を分析した結果を表8に示した。43%の母親が現在あるネットワークに満足していたが、51%の母親はネットワークを拡大したいと考えていた。前者には、妊娠、出産の前後でネットワークに変化がない母親が多かったが、妊娠、出産後にネットワークが拡大した母親もあった。ネットワークを拡大したいと考える母親が出産後多くなる一つの要因として、育児に慣れて他者との関わりをもつ余裕が出てくることがあげられる。

7か月の子どもを持つ27歳の母親は、「育児に少し慣れてきた生後3～4か月の頃、一番友だちが欲しいと思った。」と話し、他の2名の母親も育児に余裕がでてきた頃に友だちが欲しいと話した。

多くの母親はネットワークを拡大したいと考えており、一部の母親はすでに拡大しているが、拡大したネットワークでの深いかかわりを避ける、あるいはネットワークの拡大を拒む母親も少数ではあるが存在した。

1歳3か月の子どもをもつ32歳の母親の話は、「以前住んでいた所には、グループを仕切る人がいて、妊娠中からいろいろと仕切られて嫌な思いをした。…半ば強制的な誘いの電話がかかってくることもあった。引っ越しをしてグループと離れることができたのでほっとしている。こちらは、みんな好きな時間に公園に出てくるし、買い物も自

由にしており、その場で話をするだけの関係なのでとても気が楽だ。今後もどこかの育児サークルに参加するつもりはないし、そのような友だちを作ろうとは思わない。」と深いかかわりを避けるものであった。

また、1歳の子どもの持つ30歳の母親の話は、「ほかの子どもとは成長、発達を比較したくないので、今はほかの子どもとの接触をこちらから持とうとは思っていない。自分の親にでも『〇〇ができないのね』と言われることも嫌だ。育児書に書いてあることを読んで不安になる。幼稚園に入るまでは、このまま親子だけの生活で良いと思っている。幼稚園も何歳で入園させるかは考えていない。」とネットワークの拡大を拒むものであった。

表8 育児をする母親のネットワーク

育児をする母親のネットワーク		人 数
現在あるネットワークに満足している	妊娠・出産前からネットワークがある	8
	妊娠・出産後にネットワークが拡大した	3
	妊娠・出産後に拡大したネットワークで今後かかわりを深めたい	1
	現在はネットワークを拡大する余裕がない	2
	ネットワークでの深いかかわりをさける	1
ネットワークを拡大したい		18 (43%)
ネットワークを拡大したくない		1 (3%)
近所でのネットワークはない		1 (3%)
合 計		35 (100%)

## 考 察

### 1. 夫の育児協力

24名(68.6%)の母親が、夫の育児協力に触れており、15名が協力的、9名が非協力的と評価した。大日向(2000)が幼稚園や保育園に子どもを通わせている1020組の父母を対象に行った父親の家事育児参加の実態調査でも、夫の家事育児参加に対して、母親(妻)の60.9%が「満足している」、「どちらかといえば満足している」と回答している。本研究は全ての母親が夫の育児協力の評価をしたものではないので、大日向の結果と数値を直接比較することはできないが、ほぼ同様の傾向を示している。夫の育児協力(牧野, 1982; 梶本他, 1999; 両角他, 2000)あるいは夫の育児協力に対する母親の満足(梶本他, 1999)は、母親の育児不安の軽減に寄与することが明らかになっている。夫の具体的な育児協力のみな

らず、子どものことを夫と話す時間（川井他，1994）あるいは子どものことに限定せずに夫と話す時間（牧野，1982；両角他，2000），夫からのサポート感（坂間他，1999）も母親の育児不安を軽減する。また，夫の育児参加，夫と話す時間，夫からのサポート感は，母親の抑うつ感の軽減にも寄与していた。本研究でも24名（68.3%）の母親が夫の育児協力に対する評価を行っており，夫の育児協力に対する関心が高いことを示している。このように，夫の育児協力が母親の関心事となるのは，夫の協力により母親の育児不安が軽減されることと密接な関係があると考えられる。

今井（1998）は，1歳児を持つ母親165名を対象に出産前後のパートナー満足度の調査を行った。その結果，パートナーに対する満足度が下降した母親の夫は，育児により母親のストレスが高まった時に話を聞かず，出産後夫婦の会話が減少し，子どもが病気の時に頼りにならないという特徴があることを明らかにした。このことは，夫の育児協力は母親の育児不安を軽減するばかりではなく，夫婦関係の満足にも影響するといえる。和田（2000）は，3歳児健診を受診した1455家族を対象に，父母の家族機能，抑うつ，養育行動，育児評価を調査し，家族機能（核家族の場合は夫婦関係）の劣る養育者は，抑うつ感が強く，好ましくない養育行動が多く，子どもを育てにくいと評価する傾向があることを明らかにした。これらの知見をあわせて考えると，夫の育児協力の不足は，母親の育児不安を高めるばかりではなく，夫婦関係の満足度を低下させ，夫婦関係の悪さは養育行動にも影響することになる。本研究で夫の育児協力に関心を示した母親たちの話からも，夫の育児協力は，直接的な効果だけでなく，夫婦関係での満足を通じて間接的にも育児に影響を及ぼすことが推測できる。

## 2. 地域社会とのかかわり

他者との交流について話した19名の母親のうち，近所の人と交流があったのは2名で，10名が近所づきあいはないとしていた。乳幼児を持つ母親の地域社会とのかかわりについての調査としては，育児不安の高い方と低い方のそれぞれ25%を分析対象とした牧野（1982）の1981年横浜市での調査と，両角ら（2000）が1993年に長野市で行った調査がある。立ち話程度以上の近所づきあいがない母親の割合は，牧野の結果では189名中21名（11.1%），両角らの結果では222名中30名（13.5%）であった。本研究の対象では，近所づきあいがないと明示的に述べた母親

が35名中10名（28.6%）もあり，近所づきあいについて話さなかった母親を全て近所づきあいがあると仮定しても，他の結果と比較して高率である。育児不安あり群と不安なし群とで近所づきあいの件数を比較すると，育児不安あり群では近所づきあいの件数が少ない（牧野，1982；両角他，2000）。また，同年齢の子どもを持つ母親とのつきあいの程度では，不安あり群では挨拶程度の浅いつき合いが多く，不安なし群では泊まりに行くなどの深いつき合いをしていることがこれまでに明らかにされており（牧野，1982），近所づきあいで見れば，本研究の対象者は育児不安が高まる要因をもっていることになる。

このように近所づきあいは育児不安の減少に役立つが，子どもが生まれたからといって今までなかった近所づきあいを急に始められるものでもなく，近所がそれを望んでいる保証もない。そこで，23名の母親は，子どもを持つ母親との交流を求めて育児相談，乳幼児クラス，スイミング・スクール，公園などに出かけていた。育児相談へ参加する理由をある母親が「こういうところに来ると誰かが話しかけてくれるので」と言うように，子どもを持つ母親にとって，育児相談などは他の母親に話しかけることが許された場所という意味を持っているのかもしれない。梶木ら（1999）は，1歳6か月の子どもを持つ母親1442名を対象として育児不安の構成要素として「育児困難感」，「楽しい・満足感」，「拘束感」の3因子を抽出し，育児サークルへの参加は「楽しい・満足感」を高め，遊び仲間へすぐ入れる母親は「育児困難感」が低く，「楽しい・満足感」が高いことを明らかにした。この結果は，育児サークルに参加することで育児不安が軽減するが，母親の性格によってなじめる場合とそうでない場合があることを示している。したがって，性格やその他の条件が異なる母親たちが他の母親と交流をもつためには，出会いの場にも多様性が求められる。

また，母親のネットワーク拡大要求と夫の育児協力の関係を検討すると，育児に非協力的な夫の割合は，ネットワーク拡大要求がある母親12名のうち7名（58.3%），ネットワーク拡大要求がない母親11名のうち2名（18.2%）で，育児に非協力的な夫がいる母親はネットワーク拡大要求が強い傾向が見られ，夫の育児協力と母親のネットワークの間には相補性がある可能性が示唆された。しかし，本研究では対象数が少なく，全ての母親に同一の質問をしたわけではないので，このことは今後の研究でさらに検討する必要がある。

### 3. 母親の就業

母親の就業については9名が話し、このうち2名が現在就業中、3名が育児休暇中、1名が復職を考慮中、3名が今回の妊娠、出産を機に退職していた。仕事をしている母親は、「今仕事を辞めると今以上のポジションを得ることができないだろう」と考え、育児と仕事の両立を図り、育児との両立が困難と判断し退職した母親は、今回のインタビューでは育児不安や夫への不満を多く話した。また、育児休暇中の保育士が「子どもを預けて働いている母親の方が、生き生きしていることが多い」と話した。有職の母親は、無職の母親より育児不安が少なく(牧野, 1982; 坂間他, 1999; 両角他, 2000)、精神的側面の疲労が軽く(光岡, 小林, 奥田, 池口, 芳原, 1999)、状態不安も軽度であるという報告がある(島田, 1990)。仕事をすることで育児不安などが軽減すること、母親は仕事から何かを得ているということであろう。

仕事ばかりではなく、学習や地域活動などの社会参加や趣味の時間がある母親は、これらが無い母親よりも育児不安が少ないという報告もある(牧野, 1982; 両角他, 2000)。育児をしている母親が自分の趣味に時間を割くことを快く思わない社会の風潮があるが、山崎(1997)が3歳の子どもを持つ母親7名を対象に行った研究によると、育児をする母親は、わが子に必要とされる「母親としての自己」、社会(職場)で必要とされる「母親として以外の自己」の充実を望んでいると報告されている。したがって、母親を育児だけに縛るのではなく、子どもとの距離をとる心の余裕と育児以外のことができる時間を持てるようにすることが母親の心理面での健康状態を改善するのである。

## おわりに

今回、広島市近郊のA市が開催する育児相談に参加した母親35名を対象にインタビュー調査を行い、夫やそれ以外の育児協力、母親と子どもの友だち作り、母親のネットワーク拡大要求の現状を把握することができた。

今後は、育児をする母親のソーシャル・サポート・ネットワークを包括的に把握するために、今回の結果をもとにして作成した質問紙を用いた調査を大きな集団に対して行い、それによって、母親の育児不安、夫やそれ以外の育児協力、母親と子どもの友だち作りなどの社会との交流を量的に把握するとともに

に、それらと母親の性格特性やその他の属性との関連を分析し、さらに子どもの成長に伴うそれらの変化をみる必要がある。

この研究のための調査にご協力いただいたお母様方ならびに保健婦の皆様は心よりお礼を申し上げます。なお、本研究の一部は、文部省科学研究費補助金 基盤研究(C)(2)(課題番号:11672384)および日本赤十字広島看護大学の共同研究費の助成を受けて行った。

## 文 献

- 今井栄子(1998). 出産後の母親の感情と夫婦関係 1歳児をもつ夫婦の調査. 助産婦雑誌, 52(3), 251-256.
- 川井尚, 庄司順一, 千賀悠子, 加藤博仁, 中野恵美子, 恒次鉄也(1994). 育児不安に関する基礎的検討. 日本総合愛育研究所紀要, 30, 27-39.
- 牧野カツコ(1982). 乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉. 家庭教育研究所紀要, 3, 34-56.
- 榎本妙子, 福本恵, 堀井節子, 小松光代, 塩見武雄(1999). 育児不安の実態と関連要因の検討(第2報)―育児不安測定項目の因子分析―. 京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要, 8, 163-172.
- 光岡摂子, 小林春男, 奥田昌之, 池口恵観, 芳原達也(1999). 乳幼児を持つ母親の疲労と育児不安. 体力・栄養・免疫学雑誌, 9(1), 30-39.
- 大日向雅美(1999). 子育てと出会うとき. 54-56. 東京, 日本放送出版協会.
- 両角伊都子, 角間陽子, 草野篤子(2000). 乳幼児をもつ母親の育児不安に関わる諸要因―子ども虐待をも視野に入れて―. 信州大学教育学部紀要, 99, 87-98.
- 坂間伊津美, 山崎喜比古, 川田智恵子(1999). 育児ストレスの規定要因に関する研究. 日本公衆衛生雑誌, 46(4), 250-262.
- 島田三恵子, 松浦賢長, 宮原忍(1990). 育児中の母親の不安に関する研究―STAI得点と属性等との関連―. 母性衛生, 31(2), 221-228.
- 和田紀子(2000). 三歳児健診を受診した児にみられる問題と家族機能の評価. 小児保健研究, 59(1), 25-34.
- 山崎あけみ(1997). 育児期の家族の中で生活している女性の自己概念―「母親としての自己」・「母親として以外の自己」の分析―. 日本看護科学会誌, 17(4), 1-10.



吉田弘道, 山中龍宏, 巷野悟郎, 太田百合子, 中村孝, 山口規容子, 牛島廣治 (1999). 育児不安スクリーニング尺度の作成に関する研究－1・2か月児の母親用試作モデルの検討－. 小児保健研究, 58 (6), 697－704.

# The Social Support Network of Child Rearing Mothers: Its Actual Situation and Their Intention

Mayumi NOGUCHI\*, Haruko SHINKAWA\*, & Akira TAGAYA\*\*

## Abstract:

Although it is known that social support reduces maternal anxiety related to child rearing, the social support network of the child rearing mother has not been investigated. The purpose of this study was to describe the social support network of child rearing mothers and to explore their desire for expansion of their network. Interviews with thirty-five mothers who came to the child care consultation held by A city in Hiroshima prefecture provided the data for this study. The content analysis of thirty-five interviews based on 264 context units revealed ten categories of the child rearing environment: 1) reasons for coming to the consultation, 2) assessment of the mother's own child rearing, 3) the husband's participation in child rearing, 4) informational support from someone other than the husband, 5) tangible support from someone other than the husband, 6) the neighborhood environment, 7) the mother's friends and acquaintances, 8) the mother's going out from home, 9) the child's friends, and 10) the mother's occupation. Content analysis of thirty-five sampling units (i. e. mothers) revealed that although 43% of the mothers were satisfied with their social support network, 51% of the mothers wanted to expand it.

## Keywords:

child rearing, mother, social support network

---

\* The Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing

\*\* Nagano college of Nursing